

## 1 か月半の活動報告レポート(一部抜粋集)

てつたろうインターン生 坂井瑞希


### インターン初日

理解のため、初日は柳川社長からてつたろうの歴史やイーデリへの思いについて話を伺った。私はイーデリについて「持続可能な生活困窮者支援」だと認識していたが、実はそれだけではなく、「料理人の働く場を作る」という意味で飲食店支援にもなっていたことを理解した。困窮する人を救うために必要なことは、経済を回すことだ。お金を出すことではなく、その人が（目に見えるもの・見えないもの関係なしに）「生産」を行い、相互作用の結果お金を持続的に渡すことのできる「場」を作り出し、お金のサイクルを生み出すこと。社会全体が困窮した際情勢を回復させたのは、国民を職に就かせ、雇用を安定させたことであると、歴史を振り返ってみても分かると思う。これを理解できたのも、社長や社員の方々と直接コミュニケーションが取れたからだと思う。どれだけホームページや YouTube から情報収集したとしても、実際に会い、話をしなければ分からないことはたくさんあると感じた。

### 大阪自殺防止センター

イーデリの取り組みの一つとして、てつたろうでは大阪自殺防止センター（国際ビフレンダーズ）の方々にお菓子を配っている。私も同行させてもらい、センターの北條理事長に話を伺った。私は以前から、「寄り添う」とはどういうことなのか疑問に思っていた。「共感すること」は寄り添うことと似ているような気がするが、心の底から共感できていない場合、それはたちまち薄っぺらさを帯びてしまう。とはいえ、人間であるかぎり皆心の底から共感できることばかりではない。また、「肯定する事」も違う気がする。「自分はここがダメなんだ」と言った時「いやあなたは何も悪くない、ダメじゃない」と言われても私は「その人なりに私の味方でいようとしてくれているんだな」とは感じるが、「寄り添ってくれている」とは感じない気がする。だから疑問に思っていた。けれど、今回北條さんの話を聞いて「その人に真摯に向き合い、その人を理解しようとする事(理解することではないし、相手を完全に理解することはそもそもできない)」が「寄り添う事」へ繋がるのだと感じた。寄り添うことはきっと誰にでもできることだが、単純かと言われたら、そうではないと思う。これからの未来で誰かから相談を受けるとき、寄り添うことのできる人間





でありたいなと思った。また、てつたろうはお菓子を配るという形でビフレンダーズの職員の方やボランティアの方に「寄り添っている」のだと理解した。

北條さんは「お菓子をもらえること自体も嬉しいが、『自分たちがしていることを見て、応援してくれている人がいる』という事に元気づけられる」と話していた。その後、インタビュー内容を社員の岩さんと共有していく中で、人間誰しも誰かにどう思われたいという承認欲求以前に、自分を見てほしいと思う欲求がある生き物だろうという話になった。居場所になるためには、認めたり、肯定したりせずとも、話を聞き、コミュニケーションをとることを通じて相手を見るだけで十分であり、むしろそれが一番重要だと思うようになった。北條さんのインタビューで、社長やその周りの方々の想いを感じることができただけでなく、自分の人生において大事にしたいと思う考え方も得ることが出来た。

大阪自殺防止センター <http://www.spc-osaka.org/>

## 2回目の夜回り(路上生活者への弁当作成・配布)

夜回りでは、お弁当の配布と共に情報の提供や共有も行っている。ただお弁当を配るだけではなく、お弁当を取りに来る人に、生活保護や仕事の紹介ができることを伝え、自立を促す働きも兼ねているのだ。そのため、お弁当配布時のコミュニケーションはとても重要になってくる。私は今回、Homedoorの川口理事長、スタッフの方やボランティアの方、そして社長と共にお弁当配布を行った。彼ら(路上生活者)に対する川口理事長の姿勢は、い



つも対等だった。上からでも、下からでもない。そこには、一度失敗してダメじゃなくて、失敗しても大丈夫な世の中を目指している川口さんの想いが垣間見えた。てつたろうに帰ってきてから岩さんと話をしていく中でも話したことだが、結局は「人」と「人」なんだと思う。日本語には、枠をつかんでから細かいところに行く文化がある。時を指すのも年→月→日→時間だし、住所も都道府県→市→地区→番地だ。だからもしかすると日本人は、枠組みから見る文化が強いのかなと思う。多くの人は、「その人」ではなく、その人の年齢や立場を見て、レッテルを貼り、その人を知っていく。もちろん、ターゲットを設定することに



役立つし、効率的な考え方だと思う。しかし、枠組みにばかり目を向けていると大事なことを忘れてしまうだろう。お弁当配布対象の人たちを「ホームレス」や「生活保護対象者」とするのはなく、「その人」として見ることで、川口さんのような姿勢ができていくのだと思う。その姿

勢になるためには、その姿勢を意識するだけじゃなく、いろんな「人」を知り、いろんな方のお話を聞くことが大事だと思う。

### イーデリ利用者様インタビュー

今回一番問題に感じたのは、イーデリの持続可能性があまり利用者様に伝わっていないのでは、という点だ。イーデリを通じて利益が出ていることが伝わらず、ボランティア精神のみで行っていると思われてしまっは元も子もない。食事券としてお店をご利用された場合、純粋に飲食店の利益へと繋がるため飲食店の応援に繋がる。また、食事券として店内利用されない場合、1000円分のお弁当の半分は材料費、その他NPO法人への支給、その残りは粗利になる。つまり、社会貢献にも飲食店応援にもなる。そのため、無償で支援しているわけではなく、利益も生まれる前提で収支計画を行っている。しかし、そのあたりが世に出ていないという事に気づくことが出来たため、情報の開示をしていきたいと思った。また、NPO法人が食事作り・提供するよりも、技術や環境が整っているてつたろうが食事を作ることでNPO法人も食中毒などのリスク回避、時間削減となり、NPO法人側へのメリットがあるということも、伝えていきたいと感じた。真剣であるほど、小さな問題に気付かないものだ。それらを見つけ、改善するためには「利用者様の声」は無くってはならないものだった。上記にあげた問題点は、社内で話し合いながら具体的な策を考え、改善していこうと思う。

今回インタビューさせていただいた方々は皆さま素敵な人ばかりで、夢や情熱を持たれていた。もちろん、常に熱い想いをもち続けながら生活しているというわけではないのかもしれないが、皆さんのそれぞれの想いをてつたろうに託してくださっているという事、そしてそんな方たちとの繋がりに感動した。

### 3回目夜回り

今回も前回、前々回同様、容器に料理を詰めていった。前々回はお肉や魚が多めに入っていて寒い冬を乗り越えられるよう、という気持ちが込められていたのに対し、前は温かくなってきたという事で野菜多めのラインナップになっていて、栄養がたくさん取れるよという想いが込められていたそう。そして今回（3月8日）は、ちらし寿司や筍など春を感じるおかずが多く入っていた。さばの日ということで、鯖やグループから鯖寿司の提供があったという事もあり、さばが多く入っていて、ダジャレも効いた楽しいラインナップとなっていた。岩さんは一回目



の夜回りの時、お弁当の献立を考えるのも、自分たちは勉強になると言っていた。その意味をその時よりもさらに理解できたような気がする。これまでのお弁当の違いを見たり、ビデオ撮影時の岩さんのコメントを聞いたりして、(当たり前的事かもしれないが) 食べる先に「人」がいることを感じた。

### 1か月半を振り返って

一日一日がとても濃く、長く感じていたが、気付けばもう1か月半経っていた。この1か月半の間、毎日、私はたくさんの方のことを学ばせていただいた。学校で習うようなこと(PDCAサイクルやSWOT分析、事業ステップなど)を実際の現場で触れることも出来た。卓上で学んだばかりのことを、実生活で目の当たりにできることはそうそうないだろう。これが生きた学びなのだと感じたし、とても勉強になった。これから大学で勉強していく中でも、今回のインターンで触れたものに再び触れ、より学びを身近に感じることができると思うと、これからの大学生活にもとてもワクワクしている。

しかし今回のインターンでは「何かのやり方を学んだ」というよりも、いろんな人たちの取り組みや想いを知り、様々な物事の考え方を学んだことが大きかったように思う。上記に書いた方々だけでなく、お店に来てくださった常連のお客様(シングルマザー支援関係者、支援学校関係者、若者支援関係者、教育支援関係者、防災関係者、てつたろうに投資をした中学生)にお話を伺ったり、農芸高校の生徒さんとお話をしたりする中で、新たな発想や考え方が無意識的に取り入れられ、私の一部になっていることを感じることもある。社会や人、問題に対する意識がより強くなっていることを嬉しく思うとともに、そんな環境で活動を行えたことにとっても誇りに思う。また、社長や社員の方々の想いを近くで感じることができたことも私にとってはとても大きなものだった。熱い情熱を持った方々とめぐり合えたことをとても幸せに思う。



※このレポートはいくつか作成したレポートを一部抜粋しながら一つにまとめたものです。